



作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

有給休暇プラス病欠

年間の有給休暇31日に、病欠25日。ドイツの平均だ。当然、どちらもお給料は出る(病欠の方は医療保険が補填)。

とはいえ、病欠25日はいくら何でも多すぎる。ドイツ人は病弱になってしまったのか……。いや、ドイツ人の休暇に対する情熱を見ていると、それほどか弱そうにも見えない。

週休2日の場合、有休5日と合わせると、まるまる1週間の休暇が取れる。多くのドイツ人はまとめて15日ほどの有休を使って、1年のどこかで3週間ぐらいの大きな休暇を取る。これを生きがいとしているドイツ人は多く、休暇の中身は非常に多様、かつアクティブである。なお、休暇中に病気になったら、その分は差し引いても構わない。

大きな休暇の時期設定は、工場など一斉にお休みになるところは別だが、その他の職場では業務が滞らないよう、11月ごろから各自が翌年の休暇の希望時期を提出し、刻々とタイムテーブルが決まっていく。その際、子どもや夫婦の都合もあり、調整は時にかなり複雑になるのだが、他のことはなかなか進まないドイツで、これだけはなぜか速やかに決まる。私にとって、ドイツの七不思議の1つだ。

なお、その他の時期にもやはり有休を駆使して、10日とか2週間程度の休暇を取ったり、小出しで4連休にしたりと臨機応変。いずれにせよ、有給休暇を1日たりとも無駄にしないのがドイツ人である。病欠の25日は、それにプ

ラスの話だ。

ちなみに、これだけ休んで、しかも人口は日本のほぼ3分の2なのに、ドイツは昨年、日本のGDPを抜いたのだから、日本人の労働効率はよほど悪いのか。いや、日本はサービスが良すぎて、しかも、そのサービスが安すぎるのだ。

それに比べてドイツでは、劣悪なサービスに法外な料金を取られる。また、治安が悪いので、ブンデスリーガのサッカー試合や、しょっちゅうあちこちで開催される抗議デモのたびに、膨大な数の機動隊が投入される。そして、サービス料や、機動隊の経費、そして、今日のテーマである医療費なども、皆、GDPに加わる。どっちがいいんだか……？

電話一本でもらえる診断書

コロナの時、ドイツでは、疑似コロナも本コロナも、快癒後も家で待機しなければならなかったのが、病欠が年間20日にまで増えたが、しかし、コロナ騒動はとっくに終わっている。それなのに、大手医療保険会社AOKによれば、病欠は以後も記録更新。24年は、インフルエンザの流行も始まっていない最初の8カ月間で、すでに前年全体の病欠数を抜いてしまった。5年前との比較では、なんと70%増だ。

一番多いのは風邪と呼吸器感染症らしいが、それ以外で増えているのが精神疾患。ドイツでは、極端な人件費の切り詰めで職場の一人ひとりに以前より多くの負担がかかっており、そのプレッシャーが就労者の心を圧迫する。24年は、精神疾患による病欠日数が、前年に比べて